

シンポジウム  
《文字の力》

報告者

納富信留（慶応義塾大学）

師尾晶子（千葉商科大学）

高橋宏幸（京都大学）

コメンテーター

金山弥平（名古屋大学）

周藤芳幸（名古屋大学）

小川正廣（兼司会、名古屋大学）

6月6日(土) 午後2時50分～5時50分

一橋大学

主催 日本西洋古典学会

(趣旨)

紀元前8世紀頃から用いられたアルファベットは、その後の西洋古代世界にさまざまな変化をもたらした。このシンポジウムでは、文字使用がギリシア・ローマの社会と文化にどのような作用をおよぼしたのかという問題をめぐって、哲学・歴史・文学の分野からの報告にもとづいて討論する。

(報告要旨)

### 書き物は哲学をどう創り出したのか？

納 富 信 留

古代ギリシアで用いられたアルファベット、それによる書き物が文明を創造・変容したことは、広く認められている。書き物は知の展開、とりわけ「哲学」(フィロソフィア)の成立と発展にどう関わったのか？ 語り言葉を中心とした文化にどのような本質的な変化をもたらしたのか？ 書き物が成立し普及した前6～前4世紀を中心に、古代哲学のあり方を再考したい。

#### (1) 流布と反復: 社会的意義

語り・歌いの特定の場と聴衆において成り立つ「詩」との対比で、書き物はそれを超える可能性をもっていた。著作は(まず私的な場で読み上げられたのであろうが)独立に流布して空間・時間的により広範囲の読者(聴衆)に思索を伝え、活発な議論を巻き起こす。「散文」を開発したイオニアの探求は、書き物における記録の蓄積や正確で反復的な検討をもたらし、集中による思索の深化や客観的な研究を可能にした。他方で、著者や場を離れた書き物もつ不安定性・恣意性・固定性が、次第に強く意識されるようになる。対話篇を用いたプラトンや書簡形式を用いたイソクラテスは、そういった書き物の特性を逆用して社会的効果を発揮させる。

#### (2) 書かれた言論: 哲学的意義

ヘラクレイトスは書かれた文字でしか実現できない謎掛けに哲学的意味を込めたが、思索の根は「語る／聴く」ロゴスにあった。古代ギリシアにおいて語り言葉の基底性は、書き物に簡単に取って代わられることはなかった。しかし、即興演説を誇る弁論術(語りの技術)の本流ゴルギアスとアルキダマスに対して、書き物として弁論を徹底させたイソクラテスは、「言論」のコンセプトを変えていく。プラトンも、ソクラテスが交わした「対話」を「対話篇」という書き物の形で哲学そのものに昇華させた。そして、アリストテレスが与えた講義は「講義録」として読み継がれ、そのテキストに註釈し解釈することで新たな思索が生まれる。

#### (3) 書き物と伝統: 歴史的意義

古代から中世・近代、そして現代への伝統の継承は、書き物に全面的に依拠していた。ソクラテスや懐疑論者たちのような書かない哲学者たちの言行も、やはり書き物をつうじて伝えられたのである。だが、語られたが書かれなかった思想が失われ忘却されたとしたら、書き物と哲学は「伝統」として同義となる。何が書かれ、何が書かれなかったか？ プラトン哲学の「書かれざる学説」の問題からも考察される。

文字は、思考の記録や反復を可能にすることで本格的な哲学の成立を促したが(無文字文化における知的営為が比較されるかもしれない)、文字そのものが独立にではなく、語り言葉を補完して哲学的思索を徹底・深化させる役割を果たしたと考えられる。本報告では、書き言葉の哲学における意義を、以上の観点・素材を中心に多角的に考察したい。

## 文字と社会

師尾晶子

文字の普及は社会にどのようなインパクトを与えたのだろうか。

前 750 年ころ、オーラルコミュニケーションにたよっていたギリシア世界にアルファベットが導入されると、オーラルコミュニケーションを主体としながらも、文字を媒介としたコミュニケーションが並立することになった。話しことばが、記憶にとどめられることはあるにせよ、語られてはそのつど消えていく性質のものであるのに対して、文字に書かれたことばは、忘れ去られることがあっても文字の書かれた場を見ることによってその存在と記憶が呼び覚まされる。すなわち、話しことばが耳に依存するものであるのに対して、書きことばは目に依存するものであった。ギリシア碑文に頻出する「だれであれ望む者が見ることができるようにこの石碑を建立すべし」というフレーズは、ことばが書き記されるということの本質を簡潔に語っていると言えよう。文字の登場によって社会における記憶のありかたにどのような変化が生じたのか、また記憶と記録のあいだにはいかなる関係性が認められるのか、を考えるのが報告の第一の柱である。

初期の文字使用において目につくのが「名乗り」である。所有者の銘はもちろんのこと、奉納物には奉納者の名前と奉納する対象である神名が刻まれた。製作者の名が書き加えられることもあった。墓碑には死者の名が刻まれるとともに、しばしば墓の建立者および製作者の名が添えられた。もちろん、人々は、文字の出現よりもずっと前から、死者の記憶をとどめるために埋葬場所にしるしをつけ、神々の加護を受けるために、そして神々への感謝の表現としてことにつけて奉納をおこなっていた。文字の登場は、当該者が自らの名を記録し、モノと当該者との関係、さらには当該者の希求を長きにわたって社会に晒すことを可能にしたのであった。このことを端的に示すのが、前 7 世紀初頭にマンティクロスなる人物によってアポロンに捧げられたブロンズ小像に刻まれた碑銘である。

ところでこの「名乗り」の慣行は、きわめて早い時点から、富裕者層に限らず、より幅広い階層の人々にも広まっていたことが、初期の文字史料の状況から推測される。このことは、文字に書き記すことから生まれる特別な力と効果を相当数の人々が感じ取り模倣していたことを示唆していると言えよう。社会、とりわけ宗教儀礼における文字の受容と役割について考えるのが第二の柱である。墓碑や奉納慣行にとどまらず、呪詛・神託伺いなど多様な史料を取り上げることで、この問題についての考察を深めたいと思う。

高橋宏幸

言葉の伝達が音声を介する場合と文字を介する場合でもっとも異なることの一つは、言葉が発せられている直接の文脈と離れて存在しうる、ということであろう。文学の場合で言うと、口誦叙事詩の口演や演劇の上演(あるいは、法廷や集会での演説)などでは、特定の時と場において、そこに集まる聴衆を相手に、歌人や役者が、それぞれの声音や仕草、また、仮面も含めた表情とともに言葉を発するが、いまわれわれがするような読書においては、とくに西洋古典の作品を読む場合、その世界の時と場所は遠く、作者が読者を知るはずもなく、読者には作者の声音や仕草はもちろん、その「顔」も、ときには、名前も素性さえも明らかでないことがある。

この差異は文学に対してどのような意味をもち、文学にどのような変化をもたらしたのか、というと問題がやや大きすぎるかもしれないが、本報告ではそのための一つの視点として手紙、あるいは、書簡文学を手がかりに考えてみたい。というのは、そこには口演や上演と読書の間隔的な性質があると同時に、二つのあいだの差異を先鋭化させるような側面も見出せるからである。すなわち、手紙では、書かれた時と場は読まれる時と場と異なる一方、発信人と名宛人とで言葉を発する側と受ける側は定まっており、両者が親しければ、受け手は書き手が書いているときの「顔」を想像できるかもしれない。しかしまた、手紙では当事者である発信人と名宛人が親密であればあるほど、そのために暗黙の了解としてかえって記されずにあるほうが自然な事柄が生じてくる。この側面は手紙が当事者以外の第三者を読者とする場合(つまり、書簡形式の文学、あるいは、現実の手紙でも偶然の手違いや故意の盗み読みによって第三者の手に渡ったときなど)、読み手に対して、読む行為を読み解くと言い換えなければならないほどに、手紙の当事者が前提としている文脈に近づく努力を求めるともいえる。

こうした特性は、古代の作家たちによってどのように認識されていたのか、また、実際の手紙であれ、創作のものであれ、書簡を綴る際にどのような表現として取り込まれたのか、いくつかのテキストに即して眺めてみたい。より具体的には、ローマ喜劇における「手紙」の用いられ方、書簡の内容、差出人、名宛人をめぐるキケロー、セネカの意識、オウィディウスにおける表現手法としての手紙形式、といったところを取り上げる予定である。